番外編

42回生　気になる記事を共有しよう　最終両面版　昭和から

大特集　教科書に載らない昭和と自慢したいあの頃

『8時だヨ!全員集合』／朝ドラ『繭子ひとり』／ザ・タイガースの解散／尾崎紀世彦『また逢う日まで』／横綱・大鵬の引退／ジャンボ尾崎の初優勝／ベトナム戦争の泥沼化／成田空港闘争／四大公害病の社会問題化……

1971年——今から50年前、日本人が本気で生きていた時代

翌めくばなんでも手に入る、そんな時代ではなかった。人々は隠られたモノや情報を頼りにひたむきに生きていた。今の時代には失われた本当の豊かさだった。半世紀前の日本に戻ってみよう。

歌謡曲時代の幕開け

1971年は国民的人気を誇っていたグループ「ザ・タイガース」の解散で幕を開けた。ジュリー率いるタイガースが日本武道館で解散コンサートを開いたのは1月24日だった。当時、女性週刊誌「ヤングレディ」の2月8日号では、「さよならタイガース」1万人が泣いた3時間の狂乱」という特集が組まれていた。

泣いたのはファンばかりではない。このコンサート曲「僕のマリー」を歌い、感極まって大粒の涙を流した。青春のすべてを懸けた時間が終わろうとしている——。ステージに立つジュリーと会場のファンの胸には、そんな思いが去来していた。

今から50年前の71年。それは日本にとっては、まだ青春真っ只中の一年だった。政治に芸能、社会、スポーツに至るまで、すべてが熱気に溢れ、様変わりした。新しい時代の転換期を迎えていた当時、日本という国が、まるで生き物のように躍動していたのだ。

タイガースが去り、グループ・サウンズの時代は終わった。そして訪れたのが歌謡曲の黄金期だ。

誰もが「古い奴だとお思いでしょうが」というフレーズを口ずさんだ舟田淳二の『傷だらけの人

2月8日号の『ヤングレディ』。青春の美を飾る最後のライブは「タイガース・ビューティフル・コンサート」と銘打たれた

生』が100万枚を超えるヒットを記録。五木ひろしが『よこはま・たそがれ』で日本レコード大賞歌唱賞に輝き、堺正章が『さらば恋人』でソロデビューを果たした。歌手として脂の乗りきっていた尾崎紀世彦が代表曲『おふくろさん』を発表したのも、この年だ。

映画『ある愛の詩』

なかでも71年の金字塔といえば尾崎紀世彦の『また逢う日まで』だろう。恋の終わりを迎え、共に暮らした部屋を出ていくふたり。悲しい別れを受け止め、新たな道を踏み出す。人生の悲喜こもごもを歌ったこの曲に、多くの人が共感した。『週刊朝日』7月2日号には、当時人気絶頂だった尾崎の単独インタビューが掲載されている。

「歌に自信がないから一生懸命歌うしかない。どこでも、いつでも全力で歌う。息をぬいちゃダメだ。だれだってそうだろ?」

尾崎はデビュー当時から、圧倒的な歌唱力の持ち主として知られ、現在でも彼を尊敬する歌手は後を絶たない。それにもかかわらず、本人はどこまでも謙虚に、ストイックに、努力し続けていた。

作家の林真理氏が語る。

「『また逢う日まで』こそ、あの時代を象徴する一曲です。阿久悠と筒美京平、ゴールデンコンビの才能が詰め込まれている。当時、この歌は喫茶店やテレビ、いたる場所で流れていました。『また逢う日まで』によって、ようやく日本は海外文化からの借り物ではない、独自の歌謡曲を生み出したのです」

映画の分野に目を転じると、71年にはアメリカの恋愛映画『ある愛の詩』やイギリス製の『小さな恋のメロディ』が評判を呼び、多くの若者が劇場に詰めかけた。

71年はテレビ番組も名作揃いだ。NHKが金曜組カラー化を実施したこの年、朝ドラの『繭子ひとり』(最高視聴率55・2%)の山口果林に夢中になった人も多いだろう。

両親と離れて育った主人公・繭子。彼女は高校卒業後に故郷の青森・三戸町を離れ上京、母を捜し歩く。どんな困難にも押し上げるんだという熱意に溢れていました。放送作家も、年齢や経験に関係なく面白い企画を持ち込めばそれが形になるので、やりがいもあった。死に物狂いでした。

あの頃のテレビ業界には、青島幸男さんや前田武彦さん、大橫巨泉さんといった鋒々たる放送作家がひしめいていた。その中で生き残るために、毎日が戦いでした」

この頃を駆け抜けた人々が口を揃えるのが、「71年という時代の『熱さ』」だ。当時は歩行者天国が、今のようにインターネットもスマホもない。何をするにしても手探りで情報を見つけ出し、顔を突き合わせて人と言葉を交わした。たしかに、今と比較すれば不便かもしれない。だがその分、本当の意味での豊かさに溢れていた。

7月21日付の朝日新聞は、マクドナルドの日本初上陸を伝えている。記事には「本場の味をどうぞ」と見出しが打たれ、銀座1号店の写真が載せられている。異国情緒を出すために、わざわざ外国人のスタッフを雇ったというから面白い。

「71年はGパンやTシャツの流行、ファーストフードの進出など、アメリカの生活文化が広がった年でした。

中学3年だった私も、銀座三越の1階にできたマクドナルドに行きました。当時は歩行者天国ができたばかり。ハンバーガーを手に、歩行者天国を歩いたのを覚えています」(コラムニストの泉麻人氏)

同じ食品では、「人類は雑類である」というフレーズを掲げる安藤百福の日清食品が『カップヌードル』を発売した。

この頃の日本人は、とにかく本をよく読んだ。知識への飢え、もっとよくありたいという向上心。それが人々を読書へと向かわせた。その中でもベストセラーとなったのが、名曲『あの素晴しい愛をもう一度』を作詞した北山修のエッセイ『戦争を知らない子供たち』だ。

3月1日に書店に並んだこの本で、北山は「大人たちがどうわめこうと、(戦争を知らない子供たち)はその果しない行進をつづける」と高らかに宣言した。上の世代の言いなりになんかならない。俺たちは、俺たちの時代を熱くんだ。そんな熱いメッセージは、若者たちの心を捉えた。

同時に、この時代の若者は、時に深刻すぎるほど真剣に生きる意味を探していた。

高野悦子の書き『二十歳の原点』にも、生への切迫感が綴られている。この本は、前々年に自死した彼女が遺した日記を遺族がまとめたもの。立命館大学で学生生活を送る中で理想と現実に揺ぎ、揺れ動く胸の内が赤裸々に描き連ねられる。

「独りであること」、「未熟であること」、これが私の二十歳の原点である」。そんな言葉が突き刺さる。

高野の死後、6月の読売新聞には実父が「悦子は挫折感や失恋の痛手、それともふと死神にとりつかれたのかもしれません」と手記を寄せている。

この頃、水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそくの「四大公害病」が社会問題化していた。重化学系企業が川に垂れ流した汚染水に侵された住民は全身の皮膚や言語障害に苛まれた。

深刻化する公害問題の中で、71年は節目となった。巨大企業を相手に立ち向かった被害者たちが裁判で勝訴したのだ。

6月30日付の朝日新聞を見ると、一面で「イタイイタイ病訴訟 住民側が全面勝訴」という見出しが躍る。

この記事は、「判決は、また、多くの場合わずかの補償金で泣寝入りをしいられてきたわが国の公害被害住民が、はじめて自分の力で、加害企業の責任を引出したといえ、その意味で歴史的な位置づけがなされたというべきであろう」と締め括られている。

角福戦争のすごみ

3月後の9月29日、朝日新聞の夕刊には「新潟水俣病裁判、患者側勝つ」という記事が掲載される。相手が巨大企業であっても立ち向かう。そんな時代が訪れたのだ。

「公害病問題は、『もっと物質的に豊かに』と唱えるあまりに、社会問題への配慮を欠いたのだ。

71年の出来事として重要なのが、沖縄の返還協定調印だ。6月18日付の朝日新聞でも「沖縄、26年ぶり復帰確定 日米両外相が協定に調印」と書かれている。

この協定が調印された翌年、翌年5月15日には沖縄返還が実現した。

それまで「海外」だった沖縄は身近なものとなり、旅行者が激増する。

71年当時は、学生運動はすでに下火となっていた。挫折感を抱えた若者たちは、鬱屈をぶつけるかのように、社会問題への怒りを表明した。泥沼化していたベトナム戦争に対しても、新宿などでデモが行われた。

成田空港闘争が激化したのもこの年だ。成田空港の建設を巡り、2月と9月、未買収地への行政代執行が強行された。それに反対する成田の農家と学生が機動隊と衝突。神奈川県警の一小隊を滅多打ちし、壊滅状態にまで追い込んだ。

9月16日付の朝日新聞には、「成田で機動隊員3人死ぬ 第2次代執行最大の流血」と物々しい言葉が並んでいる。

「当時、私は入学した早稲田大学には通わず、渋谷にある『ライオン』という喫茶店に入り浸り詩

7月21日付の朝日新聞(夕刊)。すべきマクドナルド銀座1号店はオープン直後から長蛇の列に

7月2日号の「週刊朝日」インタビューに受け答えする尾崎紀世彦

生きた歌を歌いたいんです」

尾崎紀世彦

カップヌードル発売

脚本家・倉本聡氏の出世作といえば、ドラマ『2丁目3番地』だ。東京・四谷の美容院を舞台にした石坂浩二と浅丘ルリ子の家族物語は、しがないテレビディレクターの夫と、お茶の間の美容院経営者である妻が登場する。71年は、「ウーマンリブ」を掲げて強く生きる女性が増えた年でもある。このドラマは、新たな時代の空気を見事に取り入れていた。

バラエティ番組の白眉は、ザ・ドリフターズによる『8時だヨ!全員集合』だ。大掛かりなセットに、練りに練られたコントで、お茶の間の爆笑を誘った。

放送作家としてこの番組に携わった田村隆氏が証言する。「71年当時、番組スタッフや演者は、絶対に『全員集合』を日本一の番組に押し上げるんだという熱意に溢れていました。放送作家も、年齢や経験に関係なく面白い企画を持ち込めばそれが形になるので、やりがいもあった。死に物狂いでした。

あの頃のテレビ業界には、青島幸男さんや前田武彦さん、大橫巨泉さんといった鋒々たる放送作家がひしめいていた。その中で生き残るために、毎日が戦いでした」

この頃を駆け抜けた人々が口を揃えるのが、「71年という時代の『熱さ』」だ。当時は歩行者天国が、今のようにインターネットもスマホもない。何をするにしても手探りで情報を見つけ出し、顔を突き合わせて人と言葉を交わした。たしかに、今と比較すれば不便かもしれない。だがその分、本当の意味での豊かさに溢れていた。

7月21日付の朝日新聞は、マクドナルドの日本初上陸を伝えている。記事には「本場の味をどうぞ」と見出しが打たれ、銀座1号店の写真が載せられている。異国情緒を出すために、わざわざ外国人のスタッフを雇ったというから面白い。

「71年はGパンやTシャツの流行、ファーストフードの進出など、アメリカの生活文化が広がった年でした。

中学3年だった私も、銀座三越の1階にできたマクドナルドに行きました。当時は歩行者天国ができたばかり。ハンバーガーを手に、歩行者天国を歩いたのを覚えています」(コラムニストの泉麻人氏)

同じ食品では、「人類は雑類である」というフレーズを掲げる安藤百福の日清食品が『カップヌードル』を発売した。

この頃の日本人は、とにかく本をよく読んだ。知識への飢え、もっとよ

日本人が本気で生きていた時代

家の平川克美氏）

佐藤栄作首相（当時）の後継をめぐる政争が顕在化したのもこの年だ。ニクソン・ショックや統一地方選の革新陣営の台頭で佐藤内閣は求心力を失い、福田赳夫と田中角栄の跡目争いが激化した。7月16日付の朝日新聞では、「佐藤体制 早期引退説も強まる」と書かれている。

佐藤栄作政権の末期から田中角栄政権誕生までを首相番としてフォローした政治ジャーナリスト・野上忠興氏が語る。

「佐藤政権後半以降、田中政権を経て自民党の派閥政治の全盛期を迎えていきます。派閥の存在は、おカネ絡みの問題も起きやすい一面もありますが、バッジを付けたばかりの新人議員の教育機関としては最高のシステムでした。新人議員は先輩議員の一挙手一投足を観察し、物事を動かす現場を間近で見られるなど「生きた政治」を身をもって体験できたのですから。

大鵬引退の衝撃

スポーツ界も大いに盛り上がった。V7を達成した巨人は、まさに絶頂期。オフシーズンの12月1日に発売された日刊スポーツでは、「巨人V8へGO！ 球界の前進か 次代の巨人を築け」と見出しが躍り、川上哲治監督がゴルフを満喫しながら来年の構想を練る様子が取り上げられた。

同時に「巨人、大鵬、卵焼き」という言葉が生まれるほどの国民的英雄だった横綱・大鵬が引退した。5月15日付の読売新聞では、「大鵬引退 国技館にポッカリ穴」と大見出しがつき、ドイツ文学者で好角家の高橋義孝氏が「大鵬君はただ有名だというばかりではなく、かげになり、日なたになりして、相撲界を支えてきた人である」と賛辞を贈っている。

大鵬と入れ替わるように頭角を現したのが、7月場所で全勝優勝を飾った玉の海だ。7月19日付、の日刊スポーツでは、「玉の海悲願の全勝なる 当分続く玉の海天下」と書かれている。無傷の賜杯を受け取った玉の海も、「前年の優勝と同じくらい喜びを感じています」と語った。

そもそも当時の政治家や言と比べて、日本をどうしたいのか、どのように導きたいのかを真剣に考えていましたし、使命感を抱いてもいました。それだけ政治家ひとりひとりに迫力があり、取材のしがいもありました」

方だった四大公害問題の転機ともなった

（右）と9月29日付（下）の朝日新聞夕刊

住民側が全面勝訴

主因、カドミウム

昭和の過失認める

「情況証拠で十分」

被害者大会なお強硬

企業側、大会なお強硬

スポーツ（左）と9月20日付のスポーツニッポン（下）より

尾崎に"日本一の王冠"

にして世界スーパー・ウエルター級タイトルを獲得している。

この年のペナントレースでは南海の野村克也が、500本塁打を達成するなど目覚ましい記録が生まれた。そんな中、日本人の記憶に深く刻まれているのは、当時まだ23歳だった江夏豊のオールスターゲーム9連続奪三振だろう。

7月18日付の日刊スポーツでは、「江夏ドギモ抜く9連続三振」と見出しが打たれている。

「私はあの伝説の試合を、西宮球場で目撃しました。

江夏が三振を奪うたび、球場は異様な熱気に包まれていった。

最後、9人目のバッターは阪急の加藤秀司。彼が打ち損ねた打球がファウルフライとなったのですが、江夏がキャッチャーの田淵幸一に「追うな！」と叫んだのです。あくまで三振にこだわったのでしょう。最終的に加藤を仕留めた瞬間、球場は興奮のるつぼとなりました」（元スポーツニッポン記者の吉見健明氏）

シンシアの自然体

ジャンボ尾崎に玉の海、そして江夏。この年のスポーツは、若者たちの台頭が目立つ。新旧交代だ。それはこのジャンルだけではない。新たな時代の息吹は、そこかしこに渦巻いていた。南沙織に小柳ルミ子、天地真理の三人娘が一世を風靡したのこの時期だった。

特に、「17才」でデビューした南沙織の存在は鮮烈だった。沖縄出身の彼女はエキゾチックな雰囲気を漂わせ、世の男性を魅了した。南は11月26日号の「週刊読売」でこう語っている。

「芸能界に入って、私の人生は変わってしまいました。でも芸能人だからといって、周りの人にツンとした態度は取りたくない。普通の女の子でいたいんです」

こうした自然体こそが南の魅力だった。それまでの「作られた」アイドル像とは一線を画す存在感を放っていたのである。

南のライバルだったのが、小柳ルミ子だ。彼女の歌は古き良き「和の心」を思い出させてくれる。外国への憧れもいいけれど、この国にも負けない魅力がある。デビューシングル「わたしの城下町」には、そんなメッセージが込められている。

当時、彼女のマネージャーだったワクイ音楽事務所の和久井保氏が語る。

「あの曲は、時代の流れにも合致していたんです。当時、国鉄が国内旅行を盛り上げる「ディスカバリー・ジャパン」というキャンペーンを展開していた。ルミ子の担当になった私は、このキャンペーンに合わせ、とある城下町でミニスカートを穿いた女の子が散歩をしているイメージの曲を作りたいと思いつきました。そこで安井かずみさんに作詞を、平尾昌晃さんに作曲を依頼したのです」

昔ながらの日本の風景を切り取ったこの歌は、激動の時代だからこそ、新しく映ったのだ。

ここまで見てきたように、政治、経済、文化、映画、スポーツ、テレビ、歌――。'71年、あらゆる分野で新たな潮流が生まれ、日本は鼓動していた。

「当時と2021年を比べると、生活水準は比較にならないほど今のほうが高い。それでも将来への希望や、これから人生が良くなるという実感は'71年当時のほうがずっと強かった。その点が決定的に違うのです」（社会学者の橋爪大三郎氏）

私たちはどこで間違ってしまったのか。いくら物質的に豊かになり便利になったからといって、それに何の意味があるというのだろう。半世紀を経る中で人々はいつしか白け、希望という「熱」を失ってしまったのだ。

50年前、日本人は本気で生きていた。あの輝きは、今でも色褪せることはない。

最後に 昭和生まれから 平成生まれ 令和で活躍する人達へ

「本当の豊かさ」を手にして下さい。モノが溢れ ただ何とはなく

日が進んでいくことが豊かさではない。

熱があり、エネルギーを発し、時間を忘れ、苦しみの中に多くの笑顔

一服の清涼剤 ―。

ドライなのではなく 熱さを経験させてやることができない 私達

の社会にも大きな責任があるのでしょう。

最後も横一線でなく、右肩上がりの手書きになってしまいました。